

# 『ジュヌヴィエーヴ』にみるその「失敗」の意味 — 「複雑系」の観点から —

津 川 廣 行

ロマン『贗金つかい』の後、晩年といってもよいアンドレ・ジイドの作品に、三部作『女の学校』『ロベール』『ジュヌヴィエーヴまたは未完の告白』（以下、単に『ジュヌヴィエーヴ』）がある。順調に筆が進んだ『女の学校』（1929年）、『ロベール』（1930年）のあと、三作目の『ジュヌヴィエーヴ』の制作は難航をきわめ、その出版は六年後の1936年にまでずれ込む。「フェミニズムの問題全体と正面から」取り組むはずの大作として計画されたのが、1930年の3月であり（PD, p.85）、結局それが、*La Revue de Paris*に1936年6月15日と7月1日の二回にわたって掲載されたのは、「未完」の作品としてであった。「または未完の告白」という副題は、未だ完成にいたらないという意味だけでなく、その続きを書くことを全く放棄してしまったことのアナウンスを兼ねて付けられたものであった。

さて、《première partie》と《deuxième partie》の二部から構成されているとはいえ、『ジュヌヴィエーヴ』は、その小ぶりの規模からいってむしろ二章立てといったほうがふさわしく、ジイド自身も、その周囲の人達も、これを「章」（chapitre）の名で呼んだりもしている。こういう事情から、以下、「第二章」という呼び方も混入するが、これは「第二部」と同じものである。また『ジュヌヴィエーヴ』には、「未完」と言いながらも、その続きをなす、刊行されなかった「第三部」の草稿がのこっている。本論では、2009年刊行の新プレイヤー版に掲載されている「第三部」を参照している。<sup>1)</sup>

ところで、目下のところ筆者は「複雑系」の観点からアンドレ・ジイドの作品と思想の再点検を行なっているところである。本論は、そのような見通しのもとに書かれた論の一つであり、「複雑系」とは何か、ということについては、他の拙論においても述べてきたところである。<sup>2)</sup> 本論文で、「複雑系」とは何かということについて詳述することなくせいぜいそれがコンテクストから暗に分るといった書き方を採用したとしても、それは、本論を紙幅の制限下で単独の論文とするための配慮と工夫に基づいてのことである。

まず、ジイド自身の『日記』、その書簡、またプティット・ダームやマルタン・デュ・ガールの証言、そして、Andrew Oliver および David H. Walker の研究を参考に<sup>3)</sup>『ジュヌヴィエーヴ』の構想、執筆、刊行の状況について、確認しておきたい。

前二作『女の学校』『ロベール』のなかに登場していたジュヌヴィエーヴという人物でもってフェミニズム小説を書くとし、ジイドがこれに着手したのは1930年3月のことである。最初はとりつかれたようにすらすら書くのであるが、やがて二つの問題が浮上する。一つは、「書き方は故意に極めて平凡にした」<sup>4)</sup>というその平易な文体への彼自身の不満 (JII, 31-III-1930, p.194)、もう一つは、ジュヌヴィエーヴという人物が、作者であるジイド自分自身の思想を開陳するための道具でしかないのではないかという懸念である (JII, 25-III-1931, p.274)。1932年になると、政治問題への関心から、ジイドは一旦、『ジュヌヴィエーヴ』への興味を失ってしまう。1933年10月25日には、ジイド自身によって朗読された第二部の草稿が、これを聞いたプティット・ダームを、心理的視野が広がったとして安心させる (PD, p.344)。33年から34年にかけての仕事は、1934年4月8日に朗読されたが、不評に終わることになる。プティット・ダームの言によれば、フランコ・ベルジュ協会でのシャルル・デュ・ボスをモデルとした話が前面にでてきたために、ジュヌヴィエーヴ像は後退して、構成のバランスがくずれてしまったという。朗読のあと、マルタン・デュ・ガール、そしてとくにプティット・ダームの酷評にあい、ジ

イド自身も、非や限界を認めて、二人の前で『ジュヌヴィエーヴ』を放棄すると述べる (PD, pp.371-372)。その二日後、ジイドに向かって、あなたは自由のないソ連にたいする批判の目をもっているのに人々はあなたのことを反対に思い描いていると指摘したマルタン・デュ・ガールにたいし、ジイドは、それについてはすべてを言っていないのであって、それについて述べることは『ジュヌヴィエーヴ』を書くことよりも重要だとする (PD, p.374)。1935年10月20日にジイドは、プティット・ダームらに、*La Revue de Paris* の Thiébaud より何か掲載するものはないかと催促があったが、『ジュヌヴィエーヴ』の最初の二章を、もう続きはないという宣言とともに発表するのはどんなものだろうと相談をもちかける (PD, pp.483-484)。1936年4月20日、ジイドがプティット・ダームおよびマルタン・デュ・ガールのまえで行った『ジュヌヴィエーヴ』の朗読については、第二部とくにその結末が、プティット・ダームをいたく感動させた。第三部の冒頭からは急に調子を落とし、読むジイドの声もぎこちなくなった。この作品にはもうけりをつけさせてあげたいという思いからプティット・ダームが第三部をことさらに酷評したのにたいし、マルタン・デュ・ガールとはといえば、批判しながらも、実際には何か書きたいことがあったはずであるから簡単に店じまいをしないよう忠告するが、ジイドは、彼を酷評するプティット・ダームの側に立つ (PD, pp.520-521)。こうして、この作品は『ジュヌヴィエーヴまたは未完の告白』の題のもとに、二部構成で、1936年6月15日と7月1日の *La Revue de Paris* に掲載されることになる。ところが、もう諦めたはずの第三部に、ジイドは、その後さらに手を加えたようである。というのも、公表されなかった第三部の、ジイドに宛てた架空の自己紹介の手紙で、ジュヌヴィエーヴが、*La Revue de Paris* に彼女の最初の手記が掲載されたことに言及しているからである (RRII, p.880)。なお、単行本としては、*N.R.F.* は、これを、*Nouvelles Pages de Journal* そして *Retour de l'U.R.S.S.* との三点セットとして刊行することになる。

結局は「未完の告白」に終わったが、『ジュヌヴィエーヴ』は最初、大

作、とりわけ『贖金つかい』に匹敵するものになるはずであった。彼は、フェミニズムの大作 (un grand roman féministe) を書く、という抱負を述べている (PD, 9-III-1930, p.85)。また、『贖金』には六年かけたが、『ジュヌヴィエーヴ』には少なくとも二年かけた、というふうに、この作品をロマン『贖金』と比較してもいる (PD, 21-X-1931, p.171)。また、死の二年前には、「私は『一般の利益』、ついで『ジュヌヴィエーヴ』をしくじるのに、『贖金』を成功させるのと同じくらいの時間をかけた」(JII, 30-I-1949, p.1071) とする。

またジイドは、『ジュヌヴィエーヴ』を必ずしも、いわゆる小説 (roman) にするとは考えていなかったようであり、プティット・ダームに、『ジュヌヴィエーヴ』は小説であるか、oui et nonだ、と述べている (PD, p.109)。このころのジイドには、フィクションにたいする不信があったことを考えてみてもよいだろう。<sup>5)</sup>『ジュヌヴィエーヴ』という手記の書き手であるその女主人公も、作品のパラテキストをなすジイドへの手紙、つまり、ジイドがジュヌヴィエーヴの名で書いた手紙で、「文学がほとんど好きでない」(RRII, p.819) とのべているほか、その手記のなかでも、「私がここに書いているのは小説ではありません (…) 私はすでに文学がそんなに好きではないことは申し上げました」(RRII, p.830) としている。たとえばまた、ジュヌヴィエーヴは、パルマンチエ夫人と結婚制度について話した場面のあとで、描写をこととする文学的手法を次のように批判している。

「おそらく私は、ながいものであったこの会話を、ずいぶん簡単にしてしまったかもしれない。それがなされたのは1914年の春のことだった。私は、わたしたちがいた書斎の大きなテーブルに、リラの大きな花束があったのを思い出す。それはあまりに強い匂いを発していたのでパルマンチエ夫人は、外の空気はまだ冷たかったにもかかわらず、窓をあけるようにと私に頼んだ。おそらく私は、その場のこと、パルマンチエ夫人のこと、私自身のことを描写すべきだったかもしれない。しかし、私がここに書いているのは小説ではなく、描写は、他の人の本でもそのようなだ

が、私にとってはほとんどどうでもいいことなのである」(RRII, p.863)

ところが、そのジュヌヴィエーヴ自身、最後の母との再会の場面、結末の場面では、次のような甘美ではあるがやや月並な風景描写によって、これを典型的な小説にしてしまったといえる。

「私たちは町の公園にいた。その日は天気がよく、秋も深まっていたが、空気はほとんど暖かいほどだった。我々のそばで、散歩者が投げ与えたパンをついばんでいた鳩たちが飛び立った。母は、抑制できなくなった顔を少し引きつけて、いっそう微笑みながら私を見つめた。

《あなたは、私がマルシャン先生を愛していたってこと、今までに気がついたことある？》と、彼女は、少し震える声でいいはじめた」(RRII, p.875)

かさこそと鳴る枯葉、ふいに驚かす鳩たちの風を切る音、こういった打てば響く張り詰めた乾いた秋の空気を描写したうえで重大な告白をさせる手法は、主人公ジュヌヴィエーヴのものというより、小説家ジイドの手法そのものである。とりわけこの結末部分は、ジイドがほどこした針路変更を端的に示しているといえる。ジイドの側から言えば、「小説」でないような未曾有の「小説」、ジュヌヴィエーヴの側からいけば、文学が好きではない一女性が書いた人生の記録とでもいうべき手記は、作品としての見栄えを保つために、結局、ありふれた心理小説となってしまった。

『ジュヌヴィエーヴ』の「失敗」の意味を、ジイドの小説作法の面から見直すならば、作中人物になりきり、その人物が置かれた状況から快楽を味わいつくしたあと、つぎにその人物から抜け出て、これを批判するという、あの共感とイロニーによるカタルシスのプロセスが、この作品の場合、発動しなかったといえる。ジュヌヴィエーヴという若い女性の声を素朴な文体でまねつづけてきたジイドも、とうとうしびれを切らし、結末のところで地声を出してしまったのである。

他方また、この作品の「成功」もまた、ことさらな「小説化」による作品の美化という、根っからの小説家であるジイドにとってはお手の物

の技法に負うものである。当のジュヌヴィエーヴだけではなく、一般の読者の多くもまた、最後の場面では不意を打たれて茫然としてしまったことであろう。つまり、恋愛と妊娠・出産・子育てを切り離すという独自のフェミニズムの立場から、ジュヌヴィエーヴが子供を作ってほしいとせまった相手、すなわち、家庭教師としてたまたま手近にいた男性であるマルシャン医師を、彼女の母もまた愛していたことが、しかも自分の場合とは違って、心の支えとして深く敬愛していたことが、彼女を考えこませる。こうして、母エヴリーヌのかつての言動には「秘められた愛」という意味が付け加えられることになり、心細やかな母や、知的ではないが敏感なマルシャン夫人や、知的ではあるが少しばかり鈍感なマルシャン医師が織りなす心理的世界には、ジュヌヴィエーヴがそれまで気づかなかった深い意味が遡及的にあたられることになった。<sup>6)</sup>

こうして、『ジュヌヴィエーヴ』という作品は、この結末によって一挙に厚みを増すわけだが、ジイドはといえば、その効果に満足していたわけではなかった。ジイドは次のように書いている。

「それに、第二章は、我慢できる一種の結末をなすといったふうに終わっている、少なくとも美的には。もっとも、私が目論んだものにまったく反してであるが」(JII, 17-III-1936, p.522)

プティット・ダムはといえば、「我々は第二部にかなり心を打たれた、その結末はかくも細やかに感動的だった」(PD, 20-IV-1936, p.520)としている。

Andrew Oliver が述べているように<sup>7)</sup>、『ジュヌヴィエーヴ』、『新日記抄』(*Nouvelles Pages de Journal*)そして『ソヴィエト旅行記』の三点セットで刊行された単行本について、批評界は、『ソヴィエト旅行記』以外にはさほどの注意を向けず、『ジュヌヴィエーヴ』については、好意的なものもあり、敵対的なものもあったが、総じてどっちつかずであった。

André Billy はといえば、「『ジュヌヴィエーヴ』は、心理洞察家でモラリストのアンドレ・ジイドが特に好みの形式を見出している古典的流儀の、線的で繊細な、小ロマン、小さな物語である」としている。だが結

局のところ、作者が、女性の解放に向かおうとするジュヌヴィエーヴを支持しているのか、従属と犠牲へと向かうエヴリーヌを支持しているのか分からないとする。<sup>8)</sup> Billyの指摘は的を射ており、この曖昧さは、結末で、ジュヌヴィエーヴが、母の告白に感動し、きめ細やかな感情からなる母の世界観に少なくとも一とき、共感することからきているといえる。

*Le Figaro* で活躍した批評家である André Rousseau はといえば、『ソヴィエト旅行記』を批判し、ジュヌヴィエーヴの生き方の甘さを非難したあと、『ジュヌヴィエーヴ』は、この「作家の作品に、ほとんど何も付け加えない」としている。<sup>9)</sup>

佳品とするにせよ凡作とするにせよ、この二つの批評は、『ジュヌヴィエーヴ』がこれまでのジイドの手馴れた手法で書かれたものであるとしている点で共通している。彼らのこのような判断には、とりわけその結末の処理の仕方が与っているといっていいただろう。

最初に意図したフェミニズム小説としての性格を弱めているのもその結末である。ここで、ジュヌヴィエーヴは、「彼女のエゴイストな決心」に比して、周囲の大人達の「表明されない微妙な感情」のほうがはるかに尊敬に値すると反省しているが (RRII, pp.876-877)、この反省によってフェミニズム小説としての性格は弱められてしまったといえる。とはいえ、ジュヌヴィエーヴはその後、公表されなかった第三部において、三人の男のあいだを遍歴した結果、子をやどし、恋愛と妊娠・出産・子育てを切り離すという、マルタン医師の前で宣言した生き方を貫くことになる。つまり、ジュヌヴィエーヴの子供は、その子の父親ヴァルテールのもとではなく、彼女が別の男シルヴァンともった家庭のなかで育てられていくことになる。

フェミニズム小説としてだけでなく、『ジュヌヴィエーヴ』が参加の文学、社会小説、さらにはコμμニズム小説としても失敗したということは、刊行された第一部と第二部だけからでは分りにくいかもしれない。ただ、公表されなかった第三部では、ジュヌヴィエーヴは、自称するところの、エンゲルスの翻訳家となっていく。<sup>10)</sup> ここで彼女は、なかなか

のハンサムではあるがその言動になにか胡散臭いところのあるブルジョワ芸術家ヴァルテルと、気骨はあるが顔が極めて醜いという労働者のシルヴァンの間を行き来することになる。シルヴァンが、嘘っぱちの喧伝をするブルジョワ新聞の活字をひろうことに我慢がならず、やめてしまったことをきっかけに、ジュヌヴィエーヴとシルヴァンとさらに彼の妹のシドニーとの三人の共同生活が始まるのだが、やがて、シドニーは亡くなり、残された二人と生れたばかりの娘との家庭生活が始まろうとするところで、第三部は途切れてしまう。Andrew Oliverは、次のようにのべている。

「観念小説、参加の小説、問題小説は死んでしまった。つまり、芸術が人生に復讐し、個人の価値が社会理論に勝利し、美学がイデオロギーにたいして決定的な勝利をおさめた」<sup>11)</sup>

つまり、『ジュヌヴィエーヴ』は、フェミニズム小説としても、観念小説としても、参加の小説としても、問題小説としても、コミュニズム小説としても、社会小説・政治小説 (le roman social et politique)<sup>12)</sup> としても失敗したことになる。

ここから、『ジュヌヴィエーヴ』におけるジイドの失敗の理由として、たとえばAndrew Oliverのように、第一に、芸術・文学と社会問題の相性の悪さを、また第二に、ジイドにおける創造力の低下ということをおげるのは、ジイド自身がこの二点について随所で述べているだけに<sup>13)</sup>、当然といえば当然のことである。<sup>14)</sup>

とはいえ、結局のところジイドは、『ジュヌヴィエーヴ』との苦闘によって、何を書きたかったのかという問題が依然として残るであろう。というのも、ジイドが最初、『ジュヌヴィエーヴ』でもって既成の枠をこえたものを書こうとしたのであれば、フェミニズム小説とか、参加の小説とか、社会小説として失敗したといっても、このような「失敗」は何物をも意味しないからである。

そして実際、『ジュヌヴィエーヴ』が未曾有の作品として計画されたと  
思ふべき根拠の一つとして、当時のジイドが小説というジャンルにたい



して否定的な態度をとっていたということが挙げられるであろう。たとえば、既にのべたように、これが小説であるかどうかという点について、ジイドは *oui et non* としている (PD, p.109)。また、女主人公ジュヌヴィエーヴもその手記のなかで繰り返しこれは小説ではないとのべている。ジイド自身、1932年6月6日の『日記』に「どうしてなおも小説など書けるのだらう」(JII, p.365)と書くが、また同様のことを随所でのべている。<sup>15)</sup>

それでもなお、ジイドが『ジュヌヴィエーヴ』の執筆にこだわりつづけたこと、これは、彼がこの作品にふさわしい、新しい小説形式を模索していたということの意味するものではないか、と考えられる。第二に、既にのべたとおり、ジイドが最初『ジュヌヴィエーヴ』を『贖金つかい』と比較していたこと、このことから、『ジュヌヴィエーヴ』は初め、『贖金』同様、小説の枠を越えた小説、一種ヌーヴォー・ロマンの先駆けであるような小説<sup>16)</sup>として、計画されたのではないかと思われる。少なくとも、その点まで踏み込まなければ、『ジュヌヴィエーヴ』の成功はなかったであろう。

ところで、David H. Walker は、『ジュヌヴィエーヴ』の第三部が示す新たな可能性として、同じ大作でも、この女主人公が広い環境と接触しながら生長していく「教養小説」(Bildungsroman)をみている。<sup>17)</sup> また、もし「教養小説」という語が、こみいったストーリーをもつ人生遍歴をつうじての、マルタン・デュ・ガール風の人格形成ということの意味するのであれば、ジイドは、そのようなものを目論まなかったであろうし、もし「教養小説」というものが、一人の人間の思想とその環境の相互作用を描くものという意味であるならば、たしかにジイドは、そのようなものを考えていたのではないかと思われる。

1934年4月8日の、ジイド自身による『ジュヌヴィエーヴ』朗読の際に (PD, pp.371-372)、ジイドは、「実のところ、現実や資料を下手糞にしかつかっていないし、自分ででっちあげたほうがまだしも」であるとしてはいるが、この方面についてのマルタン・デュ・ガールの忠告に関

しては、「そういったことすべては、私には向いていない、私の制作を重くするだけだ」とする。

ここで、ジイドにとっての問題は、何を書くかという素材の問題、そしてそれを準備する資料収集の問題以上に、どんな文体、どんな調子、どんな形式で、どんな結構のもとに書くかという、一言でいえばヴィジョンの問題であったことを確認しておく必要がある。『ジュヌヴィエーヴ』においてとりわけジイドの気に入らなかったものが文体であったことは、既に見てきたとおりである。つまり、若い女性の文体でもってこれを書きとおすことが出来ず、結末では彼自身のいわば地声をだしてしまったことが、この作品の失敗につながったといえる。また、1931年5月16日の朗読のさい、プティット・ダームがジイドに注文をつけたのも、その「調子」(ton) についてであった (PD, p.145)。そして、ジイドやブルーストのような作家にあっては、文体や調子の問題は、ヴィジョンの問題であるといつてよい。

さて最後に、そのヴィジョンとはいかなるものであったのかという問いが残る。ジイド自身、六年をかけても実現できなかったそのヴィジョンについて推測するということは、大胆すぎる試みであるという謗りを受けるかもしれない。ただ、この時期、ジイドが頭に思い描いた、大作になりうるような二つの着想、これが、『ジュヌヴィエーヴ』では十分には展開しえなかったところのヴィジョンの何たるかを示唆するヒントになっていると思われる。

第一に、1933年11月2日、「フィクションはもう私の関心を引かない」とし、「まったく、ジュヌヴィエーヴという人物をとりあげなおすどんな必要があるというのだい?」と言ったその同日、ジイドはプティット・ダームに、L夫人から聞いたタヒチのハンセン病の村に興味をおぼえたことをのべている。「L夫人が私にタヒチについて、ハンセン病のあのコロニーについて話したとき、私はただただある一つの現実に関心されるのを感じたのだよ。考えてもごらん! 一つの村がそっくり孤立して、あらゆるものから切り離されて、そこで新しい風俗習慣とモラルがうま

れるんだ」(PD, pp.349-350)

第二に、Thiébaudの催促もあったことから、『ジュヌヴィエーヴ』の最初の二章を、もう続きはないという未完の作品として発表してしまったらどうかという考えを、プティット・ダームらに話したちょうどその日、ジイドは、ある架空の外国の作家にかんする事柄を何から何まででっちあげてみるのはどうか、という着想についてのべている。つまり、ある作家の伝記、注付の翻訳という形でしめされる作品集、またこれへの批評、そこにみられる影響関係の指摘など、すべてを作り出そうというのである。(PD, p.483-484)

さて、ハンセン病という条件下で孤立を余儀なくされた村に生じる新しい風俗習慣とモラルへの関心、これは、ジイド長年の、コスモゴニー、宇宙開闢説とでもいうべきものへの関心につながるものである。ソチ『鎖を離れたプロメテウス』には、一つの種が生長して大木になり、そのまわりに町ができるという話がみられる (RRI, pp.502-505)。『一粒の麦もし死なずば』では、「諸々の戦争、諸々の革命、政体の変化や、諸々の典型的事件でもって、ある一国民の、ある一国家の架空の歴史を書こうと計画した」(SV, p.272)とされる。ある一作家にかんすることをまるごと作り出す着想にも、コスモゴニーに対するのと同じ関心が隠されているといえる。つまり、風俗習慣やモラルははじめからあるものではなく、ハンセン病の村のように孤立した状態にあっても新しく発生してくるものであり、そのようにして発生した風俗習慣・モラルが、相互作用的に逆にその生活環境や物質的条件に影響を与えていく。ちょうどこれと同じように、ある作家が作品を創り出すだけでなく、その作家が社会環境や影響関係によって作り出されているとし、さらにそのようにして生じた作家の作品が、翻訳や、注釈や、これへの批評を生み出していく、このような相互作用をジイドは描きたかったのだと思われる。

ジイドが、ある一国民の、ある一国家の架空の歴史を書こうとし、孤立した村民の風俗習慣に興味を持ち、ある一作家の歴史をでっちあげようとするのも、現にある歴史なり、風俗習慣なり、モラルなりが、それ

とは別な、何かある違ったものでもありえたことを証明するためである  
 といってよいだろう。「そういったことすべては何を証明するためだっ  
 て？ 人間の歴史は、そして我々の慣例、風習、慣習、趣味、法規、美  
 の基準は違ったものであったかもしれないということ、それでもやはり  
 人間的なものであっただろうということだ」(SV, p. 272)。モンテスキュー  
 張りのこの慣習、風習、法の相対性という観点をもって、若年のジイ  
 ドは反抗の論理とし、同性愛者ジイドは自己肯定のための礎とし、晩年  
 のジイドは、すでにあるものは別のものでもありえたとして、新しい社  
 会実現のための論理としたのであった。

ジイドのこのようなコスモゴニー観のうちには、David H. Walkerにい  
 わせればダーウィニズムの影響が<sup>18)</sup>、筆者にいわせれば複雑系的思想の  
 片鱗がみられるとあってよい。つまり、ジイドが抱いているとされる進  
 化論的思想からすれば、あのタヒチの孤立した村で人々が独自の風俗習  
 慣を発達させていくに違いないと思うのは、ちょうど孤立した島におい  
 ては独特の進化によって大陸と違った生物が棲息するようになるのと同  
 じ考え方にもとづくもの、ということになるであろうが、ここにはまた  
 絶えざる分岐を生じさせるあの「複雑系的」メカニズムが働いていると  
 もいえる。このようなヴィジョンにおいては、たとえば気象現象が何か  
 のわずかな擾乱によってその後の状態が大きくかわっていく可能性をつ  
 ねに秘めているように、《偶発事》の果たす役割は実に大きい。

このようにみていくと、『ジュヌヴィエーヴ』が失敗におわった新たな  
 理由、そして最大の理由が見えてくる。それはジイドがそこに、当時の  
 もう一つの関心事であったところの偶然的要素を入れなかったというこ  
 とである。偶然的要素とは、Fillaudeauの論文を意識しながら述べれば、  
 「遊び」の要素といってもよい。<sup>19)</sup>

ここで、『ジュヌヴィエーヴ』のパラテキストをなす最初の部分、つま  
 り、この女主人公がジイドにあてたとされる手紙、実はジイド自身が創  
 作した手紙で、ジイドが、彼自身のかつての文学に、《偶発事》を対置さ  
 せていることを思い出してもらってもよい (RRII, p.819)。個々の、ささ

いな、それ自体としてはつまらない事象であるところの《偶発事》、これこそは、ジイドが、文学は嫌いだという女性をつうじて描き出したかったものであったとすることができる。

女主人公がその手記冒頭の手紙で「絶対のなかで滑空している」と批判してみせる、かつてのジイドの精神は、《滑空する》(planer) という語が表わしているように、いわばつつるつつしている。これにたいして、ジュヌヴィエーヴが書こうとした《偶発事》は、生活そのものといったがさがした手触りをもたなければならないはずのものであった。ところが、ジイドがジュヌヴィエーヴに採用させたのは、流れるような、若い、素直な、女性の文体であり、このような文体をもってしては、心理の深みは描き出すことができても、《偶発事》を描き出すことはできなかった。

かつてのジイドは、ソチというジャンルの非現実的とさえいえる極端な条件のなかで、いわば一つの「遊び」として、《偶発事》を描き出した。『ジュヌヴィエーヴ』のころのジイドは、一方では、コスモゴニーの意味での《偶発事》に歴史的レベルでの関心を示しながら、またパラテクストをなす手紙の部分ではこれをもってジュヌヴィエーヴの基本姿勢としながら、他方では、實際上この作品からそのような要素を排除してしまった。

これが排除されてしまった理由について考察するために、公表されなかった第三部をみてみよう。ここでは、ブルジョワ対労働者達という階級闘争の図式が枠組みとして採用され、わが女主人公は、ブルジョワジーという出自の階級がなおもたらしてくれる恩恵と労働者階級への共感の間で引き裂かれている。ハンサムであるが偽善的なヴァルテールに対して他方では顔は実に醜いが精神は岩のように頑健なシルヴァンという、ジュヌヴィエーヴの関係した二人の男性の対比も、そして貧しいながらも自分がエジプトの王家の末裔であるという夢のうちに逃避するシドニー対あくまで現実主義的なシルヴァンという、名前も相似た兄妹の配置も、この二つの階級思想を反映したものであるといえる。第一に、

この階級闘争のあまりにも明確な枠組みのなかに、コスモゴニ的意味での《偶発事》は、描かれうる余地を見出すことができなかつたといえる。しかしまた、第二に、ジイドはここで、《偶発事》というものを、人間にとっての、とりわけ労働者にとっての厳しい生活条件、労働条件として考えようとしていたと思われる。「偶発事＝物質的生活条件」という等式が、アンガージュマンのころのジイドにはあったことは、偶発事から遠く逃れた快適なブルジョワ的な「古い世界」と、参加のジイドが今や望む「新しい社会」を対比したところの、1929年から1932年にかけて書かれたとおぼしき次の文にも表れている。

それ [=あの古い世界] を忌まわしいものとして示すのは、馬鹿げたことである。反対に、それは非常に心地よいものだった。そう、若干の人達にとってはだが。それは、たんに居心地よい椅子や、飲み物や、歌や、香りや、閑暇をあたえてくれただけではなく、さらに、芸術作品の開花を助長したのだが、われわれの文明はそこに自らの姿が映じだされているのを見て喜びをおぼえたものだった。それは等しく私のもろもろの作品を可能にしたところのものであるが、それらはあまりに繊細すぎ、また、偶発事から引きすぎていると評価されることであろうし、私が望んでいる新しい社会にあっては、多くの読者を集めることはできないであろう。(JII, pp.446-447)

この『ジュヌヴィエーヴ』の執筆にかかわっていた期間はまた最も政治問題にかかわっていた時期でもあり、そうしたなかで彼にとって新しい価値観として意味をもった「偶発事＝物質的生活条件」という等式のために、ジイドは、コスモゴニ的意味での《偶発事》を、『ジュヌヴィエーヴ』では、アンガージュマン的《偶発事》にすりかえてしまった。そして、結局のところ、『ジュヌヴィエーヴ』第三部におけるような単純な対置によっては、タヒチの話や外国の作家の作品とその環境をまるごと作り出す際には必須であるところの、あのコスモゴニ的《偶発事》

がもつところのけばだちを描き出すことはできなかったのである。

言語 (langage) は人を欺くものであり、これへの警戒は、処女作『アンドレ・ワルテルの手記』に始まる。弱年のジイドにあって、言葉の不完全さというものが特記すべき異常事であったとすれば、晩年のジイドにとって、言語表現とは、基本的に、常套句であり紋切り型の表現であったとってよい。<sup>20)</sup> 小説というジャンルへのジイドの疑問も、一言で言えば、その常套化作用にあったとってよいだろう。「世にも完璧な小説であろうと、すぐさまそれに飽きてしまうであろう」、あるいは、「《小説》というジャンルは、完璧さを要求するに足らず、その輪郭があまりに伸縮性に富みすぎている」。<sup>21)</sup> 『ジュヌヴィエーヴ』執筆時のジイドの、小説への疑問は、われわれを紋切り型の表現へと引きずり込んでいく言語というものと同様、作家に常套的形式を強いる小説というジャンルの特性への疑問でもあった。つまり、ジイドが『ジュヌヴィエーヴ』という作品を、プルーストや彼自身のような老練な作家の文体によってではなく、文学は嫌いという人物の、比較的素直な文体で書きとおそうとしたところに、「失敗」のもう一つの原因をみなくてはならないだろう。あるいは、『ジュヌヴィエーヴ』を切り詰めてこれを「未完」のうちに「完成」させたことこそが「失敗」を意味する、とってよい。

結局『ジュヌヴィエーヴ』は、「私がここに書こうとしているのは、子供のころの思い出についてではなく、この物語にかかわる思い出だけだ」<sup>22)</sup> といった、たとえば『狭き門』などの、一つの中心なトピックに関連した出来事のみを語る、あのレシの手法でかかれることになった。このような作品の調和と統一をめざすレシの手法でもってしては《偶発事》に重要な意味をあたえることができないことは言うまでもない。

結局のところ、『ジュヌヴィエーヴ』の「失敗」の真の原因は、かつてのジイドの「絶対のなかで滑空している」精神、ないしその抽象性、たとえば彼が『日記』で「私がこんなふう巧みに文学を抽象化したかどうか」(JII, 8-II-1933) と自問するときのあの抽象性を批判し、新しい文学作品を構成するに当たって、ジュヌヴィエーヴがその手記の冒頭に

そえた手紙でしたように、《偶発事》を参入させることをもってするのではなく、これを、父ロベールへの反抗や、付き合った男性ヴァルテルのブルジョワ精神の批判というテーマとして扱い、しかも、この問題を手馴れたレシの手法で処理してしまった点にあるといえるだろう。

複雑系的観点からすれば、偶発的なものと偶発的ならざるものとを対立に考えることは短兵急であろう。というのは、前者は後者のなかにはしば潜んでいるのであって、両者はあざなえる縄のように絡み合っているからである。偶発事による絶えざる分岐の世界をすでに『贖金』を書き上げていたジイドは、このことをもまた重々知っていたといえるだろう。たとえばまた、ある外国の作家の作品を、その作家が置かれた社会環境や影響関係とともにまるごと作り出したいと思ったということ、これは、作家の社会環境や影響関係という《偶発事》と抽象化された作品とをあざなえる縄のように関連したものとして構想するというのである。この構想がもし実現したとすれば、それは、かつての彼の「抽象的な文学」の自己批判を含むものとしての新しい「参加の文学」としても成功していたであろうが、さらに、複雑系的観点とでもいべきもっと総合的な視座にたった画期的な大作として、これを越えるものとなったことでもあろう。いいかえれば、『ジュヌヴィエーヴ』の「失敗」は、ジイドが複雑系的とでもいべき観点を得ていたのに、それを書き上げるにいたらなかったところにある。この点、『ジュヌヴィエーヴ』を酷評したプティット・ダームにジイドがいともたやすく同意したのも、彼が、片肺飛行ともいべきこの作品の最大の欠点を知っていたからである。だが、「彼はこれを行きあたりばつりに書いたのではない、これはやがて分るであろう意味を持っていたはずだ」というマルタン・デュ・ガールの言葉もまた同様に正しかったといえる。

アンガージュマンのころのジイドについては、多く、政治問題と文学・芸術の問題の相性の悪さ、あるいは創造力の低下という観点から論じられることが多かった。このことは、ジイド自身が認めていることだけにますます真実味を帯びる。とはいえ、本論における『ジュヌヴィエーヴ』



の「失敗」の分析をとおして見れば、ここに、アンガージュマンの問題や老齢による創作力の低下ということでは捉え切れない、「複雑系」的ともいえる深淵が顔をのぞかせていることがわかる。度重なる挫折にもかかわらずこの作品にこだわり続けたジイドは、ジュヌヴィエーヴをめぐるテーマにかんして、書きたくても書けないもの、書けなくても書きたいものを抱いていたといわなくてはならない。そして、ハンセン病の村だとか、ある作家の作品やその環境やその影響関係をまるごと作り出すという、おそらくジイドがこの時点において最も書きたかったテーマを考え合わせれば、「未完の告白」である『ジュヌヴィエーヴ』はたんに「参加の文学」「社会小説」「政治小説」「コミュニズム小説」として「失敗」したのではないということ、そうではなく、複雑系的とでもいうべきヴィジョンに基づいた大作をものすることができなかつたことこそがその「失敗」の真の意味だったのだということが言えるであろう。

(大阪市立大学教授)

#### 注

André Gideの作品については、次の版を用い、これを、左端に示したような略号で表記する。

EC — *Essais critiques*, édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1999.

SV — *Souvenirs et voyages*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2001.

J1 — *Journal I — 1887-1925*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1996.

J2 — *Journal II — 1926-1950*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1997.

RRI — *Romans et récits — Œuvres lyriques et dramatiques*, t. 1, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009.

RRII — *Romans et récits — Œuvres lyriques et dramatiques*, t. 2, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009.

また、ジイドの娘の祖母、いわゆるプティット・ダームによる手記の略号として以下を用いる。

PD — Maria Van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, t. 2, «Cahiers André Gide 5», Gallimard, 1974.

- 1) *Bulletin des Amis d'André Gide* の2010年10月号に、Andrew Oliver による *Geneviève* の新しい édition critique の刊行・販売の案内がなされている。今回の拙論では、期日の関係でこれを利用することができなかった。今後また改めて、『ジュヌヴィエーヴ』の「第三部」について論ずることになろうかと思われるが、その際には、この édition critique の成果を反映させたい。
- 2) 津川廣行「ジイドの『贋金つかい』と《複雑系》の問題 — コスモスとカオスの狭間に —」、『仏語仏文学』第35号、関西大学フランス語フランス文学会。
- 3) Andrew Oliver, «Gide et le roman engagé — *Geneviève* ou la revanche de l'écriture», *André Gide 10, Lettres Modernes Minard*, pp.117-133; Andrew Oliver, «Un inédit gidien: le chapitre supprimé de *Geneviève*», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 131/132, juillet-octobre 2001, pp.551-559; David H. Walker, RRII, «Notice», p.1338-1352.
- 4) Lettre à Dorothy Bussy datée du 28 mars 1930, *Correspondance*, t. 2, «Cahiers André Gide 10», Gallimard, 1981, p.264.
- 5) たとえば、JII, 10-IV-1933, p.407を参照。
- 6) たとえば、Hilary Hutchinson は、「*L'École des femmes, Robert et Geneviève*: triptyque à thèse?», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 110/111, avril-juillet 1996, p.191-211で、『ジュヌヴィエーヴ』を従来のレシのタイプの心理小説であると見、これを「影響関係」の観点から読み解こうしている。
- 7) Andrew Oliver, «Gide et le roman engagé — *Geneviève* ou la revanche de l'écriture», *André Gide 10, Lettres Modernes Minard*, p.117.
- 8) André Billy, «Les Livres de la semaine: nouveaux livres de M. André Gide», *L'Œuvre*, 29 novembre 1936, p.7, repris dans *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 37, janvier 1978, p.67.
- 9) André Rousseau, «La Vie littéraire. André Gide: *Retour de l'U.R.S.S. — Geneviève — Nouvelles Pages de Journal (1932-1935)* (Gallimard)», *Le Figaro littéraire*, 14 novembre 1936, p.6, repris dans *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 37, janvier 1978, p.63.
- 10) 実際、ジュヌヴィエーヴのモデルとなった Alix Guillaïn は、エンゲルスの翻訳家であった。
- 11) Andrew Oliver, «Gide et le roman engagé — *Geneviève* ou la revanche de l'écriture», *André Gide 10, Lettres Modernes Minard*, p.129.
- 12) *Ibid.*, p.130.
- 13) 芸術文学と社会問題の相性の悪さについて、また創造力の低下についてジイド自

身が述べている箇所は枚挙にいとまがないが、とくに、ジイドが両者を関係づけて述べている箇所としては、JII, p.334; p.377.

- 14) RRII, «Notice», p.1343.
- 15) たとえば、「Fragment manuscrit supprimé de la II<sup>e</sup> partie», RRII, p.880. また、Andrew Oliver, «Un inédit gidien: le chapitre supprimé de *Geneviève*», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 131/132, juillet-octobre 2001, note 11, p.555.
- 16) Geneviève Idt, *Les Faux-Monnayeurs*, «Profil d'une œuvre», Hatier, 1970, p.17.
- 17) RRII, «Notice», p.1345.
- 18) David H. Walker, «Gide, Darwin et les théories évolutionnistes», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 89, janvier 1991, pp.63-75.
- 19) Bertrand Fillaudeau, *L'Univers ludique d'André Gide — les Soties*, José Corti, 1985.  
 なお、論者はこの点にかんして、「ジイドのリュディスム — 「複雑系」の観点から —」、大阪市立大学フランス文学会、2009年6月6日の口頭発表を行なった。
- 20) たとえば、JII, 24-XI-1928, pp.100-101.
- 21) *Interviews imaginaires*, EC, p.350.
- 22) *La Porte étroite*, RRI, p.813.